

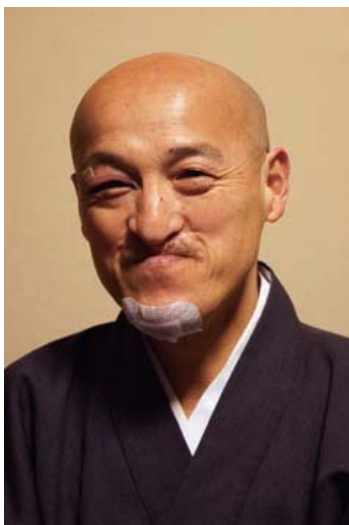
湧水を湛えた池を中心にした
名勝・浄土式庭園

湧水を湛えた池を中心とした庭園は、久安六年（一一五〇）に興福寺からこの地に入った伊豆僧正恵信が、池の周辺に石などを立てて増築したのが始まり。伽藍や坊舎の整備などをし、阿弥陀堂を東に向け、池を間に配して東に薬師仏を祀った浄土式庭園となっています。今はありませんが、江戸時代の絵地図によると、境内の南西に神社が描かれ、その横に社務所の様なものが描かれています。そこに新たに四阿（東屋）が造られました。

「池の周りを散策したときにゆっくり座って眺めて頂ける場所が無かったので、この四月に造りました。突然の雨をしのいだり、じっくりお庭を眺めて頂ければと考えています」



浄瑠璃寺庭園（史跡・特別名勝）
三重塔（国宝・平安時代）側から眺めた景色。
池の向こうに九体阿弥陀如来像を祀る本堂（阿弥陀堂：国宝・平安時代）を見る。手前と対岸に石灯笼二基（重要文化財・南北朝時代）が見える。



ご案内いただいた浄瑠璃寺住職・佐伯功勝さん

本堂と三重塔の前、池のほとりの石灯籠（重文・南北朝時代）は阿弥陀如来と薬師如来のお灯明で、池の趣をいっそう深めています。

作家・堀辰雄が『浄瑠璃寺の春』の中で、馬酔木を見るために浄瑠璃寺に来たと書いていること、俳人の水原秋桜子が浄瑠璃寺の馬酔木を詠んだことから、馬酔木の寺とも言われる浄瑠璃寺。「関西花の寺霊場」にも指定されている花の寺としても知られています。「四季折々に花は咲きますが、花の量としては多くないんです。先代のポリシ

ーで、自然の花は自然に咲くのが一番と言うことなので、農業はまきません。世間の雑踏から離れて、自分を見直すためにお参りして頂くのが浄瑠璃寺の本来の在り方です。慌ただしい日常から抜け出して、ゆっくりお参りして頂けたらいいと思います」



浄瑠璃寺山門前の馬酔木。

美しさで知られる招福の女神

秘仏・吉祥天女像



秘仏・吉祥天女像（重文・鎌倉時代）

浄瑠璃寺本堂、九体阿弥陀如来像の間に、厨子に入った吉祥天女像（重文・鎌倉時代）が安置されています。五穀豊穡、天下泰平、豊かな暮らしと平和を授ける幸福の女神です。また「一度は見たい、日本の秘仏五選」にも選ばれています。色白で、微笑んでいるかのような優しいお顔、その美しさは見た人の誰をも魅了するほど。衣服の鮮やかな色彩も見事に残っています。秘仏として年に三回の期間のみ公開されているので、この美しさが保たれているのかもしれない。今年は、東京・三井記念美術館で開催される「奈良 西大寺展」で、平成二十九年六月六日～六月十一日まで特別展示されます。

浄瑠璃寺「吉祥天女像」特別展示

●奈良 西大寺展 開催日/平成二十九年四月十五日～六月十一日
●三井記念美術館（東京都中央区日本橋室町）
*浄瑠璃寺「吉祥天女像」特別展示は、平成二十九年六月六日～六月十一日



浄瑠璃寺山門

真言律宗小田原山 浄瑠璃寺
住所 〒619-1135 京都府木津川市加茂町西小
電話 0774-76-2390
交通 JR奈良駅か近鉄奈良駅から奈良交通バスで約25分
参拝 午前9時～午後5時（12月～2月は午前10時～午後4時）
入山 午前9時～午後5時（通年）

●秘仏と開扉日
●秘仏・吉祥天女像/開扉日:1月1日～1月15日、3月21日～5月20日、10月1日～11月30日
●秘仏・薬師如来像/開扉日:毎月8日、彼岸の中日、正月3日、1月のみ8、9、10日（*ただし好天日に限る）
●秘仏・大日如来像/開扉日:1月8日、9日、10日



夏の仏事

お盆

お盆の常識

Q&A

「Q」お盆とはどんな行事ですか？

「A」お盆は、故人の精霊が浄土から帰り、ご家族と一緒に過ごすという、日本古来の行事です。お寺では『盂蘭盆会』という法要を執り行います。

「Q」お盆の期間はいつから？

「A」お盆の期間は地域によって、七月に行うところと、八月に行うところがあります。仏教においては本来、七月に行うべきものとされますが、農作業の繁忙期に重なるため、農業が盛んな地域では、月遅れの八月に行うようになりました。また、七月八月どちらの場合でも、多くは十三日から十六日の間に行われます。

「Q」六月に逝去した故人の新盆はいつになりますか？

「A」地域の習慣にもよりますが、一般的にはお盆日に四十九日忌が過ぎていけば、その年に新盆を執り行い、過ぎていなければ翌年に行います。

また新盆の準備については、基本的に普段のお盆と大きく変わりませんが、地域によって、白張り提灯を家人が飾り、また親戚や縁者の方が贈ってこられた柄のついている提灯を飾る事が多いようです。飾る時期は特に決まっておられません、八月の七日頃が目安になります。

お盆のスケジュール	
6月 【事前の手配】	中旬にお寺へ棚経や卒塔婆をお願いし、下旬になったら盆棚や盆飾り、盆提灯などを注文しましょう。
7月12日 【直前準備】	お花、お供物、お仏具、お線香などを揃え、盆棚、盆提灯を組み立て、飾り付けを済ませます。
7月13日 【迎え盆】	お位牌をお仏壇から盆棚に移し、お仏具やお花、精霊馬などをお供えします。提灯やお供物、生花などを持って家族そろってお墓参りをし、夕方になったら自宅の門口や玄関などで「迎え火」を焚き、個人やご先祖様の霊を迎えます。「迎え火」は焙烙（ほうろく）と呼ばれる素焼きのお皿の上で麻幹（おがら）を炊きます。
7月14/15日 【お盆】	朝夕に、水の子、ご霊膳などのごちそうを作り、お供えします。僧侶を迎えて法要を開き、読経をいただきます。親族や知人をお招きし、故人を偲びながら会食をすることもあります。
7月16日 【送り盆】	15日または16日の夜、「迎え火」を焚いた場所で「送り火」を焚き、精霊のお見送りをします。地方によっては飾り物や供物を盆船に乗せ、川や海に流します。 * 8月にお盆をする地域では、1か月後ろにずらします。



盆棚の見本

「Q」盆棚の飾り方を教えてください。

「A」盆棚の飾り方は地域の慣習、宗派、住宅事情によって異なりますが、ここでは標準的な盆棚をご紹介します。まず、まこもを敷いた祭壇を設け、台の四隅に葉のついた青竹を立て、竹の上部にしめ縄を張ります。用意するものは、まこものゴザ、青竹、しめ縄、素麺、昆布、ほおずき、生花、ナスの牛・リュウリの馬、水の子（ナス、キュウリをサイコロ状に切り、洗ったお米とともに蓮の葉もしくは里芋の葉の上に乘せたもの）、みそはぎの花、百味五果（夏の野菜・果物）などです。ここに位牌、供物、故人の好物などを備え、盆棚の脇には、灯りをもした盆提灯を飾ります。

お盆「地方の風習」

「盆の砂盛り」（神奈川県）

ご先祖様の精霊をお出迎え

秦野市や相模原市、平塚市などに、主に神奈川県中部から南部にかけて、毎年、お盆の入り（八月十三日）になると、家々の門口に、土や砂を盛り上げた土壇を見ることが出来ます。これは「盆の砂盛り」、あるいは「辻」「塚」などと呼ばれるお盆の風習で、この土壇にお線香を立てて造花などを挿し、「アライアゲ」と呼ばれる刻んだナスなどもお供えして、その脇で迎え火や送り火を焚くのです。ただし、この砂盛りの形に決まったものではなく、木の枠に砂が入っているものや、湿らせた砂を台の形に盛ってあるもの、階段がついているものなど、各家ごとに趣向が凝らされます。「盆の砂盛り」は、静岡県などでも行なわれるといわれますが、現在ではほとんど見かけられないことから、神奈川県を代表する風習として捉えられています。



【さまざまな砂盛りのスタイル】ひとくちに「砂盛り」といっても、石製や紙箱製、階段のあるなしなど、各家庭で設えは異なります。

取材協力/相模原市立博物館